

## 文明の源流を覗き見る エジプト

エジプト文明が誕生したのは紀元前5000年頃といわれている。エジプトは4大文明発祥の地の一つであり多くの文化遺産を後世に伝えている。これからも思いがけない発掘品が出土するかもしれない真に魅惑に満ちた国である。

エジプトを最初に統一したファラオ(王)は、紀元前3100年ごろのナルメル王と伝えられている。エジプトにおけるファラオ=王は最高権力者で、神であり神官の頂点にあり人間に対する支配者として君臨した。

王朝は紀元前3000年頃に始まり、紀元前30年に最後のプトレマイオス朝がローマ軍によって滅ぼされるまで続いた。エジプトの長い歴史は古王国・中王国・新王国に分けられる。

古王国時代、紀元前2650年頃にジョセル王が建設した高さおよそ60m、6層の石材造りの階段式ピラミッドはカイロから30kmのサッカラにあり、その後のピラミッド建造のはじめとされる。



サッカラにある階段ピラミッド

ギザには高さ137m、一辺230mのクフ王が造営したひととき大きなピラミッドと近くにはカフラー王、メンカウラー王の3つの大ピラミッドが並び立っている。5千年の時をへて今なお天高くそびえ立ち、小さな人間を睥睨しているかにみえる。



ギザの3大ピラミッド

またギザにあるライオンの体に人間の顔を持つスフィンクスもこの時代に建設されている。スフィンクスは神格化したファラオ(王)と百獣の王と恐れられるライオンを重ね合わせたのだろうといわれている。

紀元前2060年頃エジプトは中王国時代に入る。首都はメンフィスからテーベに移る。紀元前1663年頃異民族シリア方面のヒクソスが王朝をたてる。



ギザのスフィンクス



メンフィスにあるスフィンクス

紀元前1590年ごろヒクソスを駆逐しエジプトは再統一をなし新王国時代となる。首都はテーベに置いて新王朝が始まり、パレスチナやシリア方面へエジプトは領土を広げていった。アメンホテプ1世はカルナック神殿を整備拡充したし、紀元前1524年ごろトトメス1世は、今日王家の埋葬地と知られている王家の谷を建設した。トトメス2世は若くして亡くなったが、王妃であったハトシェプストがこれまで男性が担っていた王位を初めて

女性のファラオとして君臨し統治にあたった。彼女がつくらせたハトシェプスト葬祭殿は優美な姿で多くの人々を今に引き付けてやまない。

ハトシェプスト女王の跡を継いだトトメス3世は、外征を繰り返しその都度勝利し以後エジプトの国力は大いに盛んとなった。しかしこの頃からファラオをサポートしていた神官団は権力を重ねるにつれ王の権力を超えた専横が目立つようになり、遂にはアメンヘテプ4世(別名アケナテン)は首都をテーベからアマルナに移し太陽神アテンへの信仰

に改めることを断行した。それまでエジプトは多神教の世界であったがアメンヘテプ4世は、太陽神アテンだけを信仰する一神教への大改革をなしたのである。

紀元前1333年ごろ、ツタンカーメン王は首都を再びテーベに戻したが早世する。この後王に付いたホルエムヘブで王家の血筋が絶えたが、王が指名したラムセス1世が新たな王朝を設立し、ついでセティ1世が即位した。

紀元前1279年にファラオとなったラムセス2世は歴代最高の王と称され、67年間にわたる長き統治を担い、多くの神殿建造を成し遂げるなどエジプト繁栄の頂点を極めた。

紀元前341年ネクタネボ2世はエジプト人王としては最後の王であるが、ペルシャに征服されてしまいその後ペルシャの圧政は10年間に及んだが、紀元前332年マケドニア大王アレクサンドロスがペルシャに戦勝しエジプトはマケドニアに従うこととなった。アレクサンドロス大王が死去しマケドニア王国は分裂した。

やがてアレクサンドロス大王の部将であったプトレマイオスがのし上がってきて、エジプトに紀元前305年プトレマイオス朝を打ち立てた。プトレマイオスははじめ統治にあたる人たちはギリシャ系であった。首都は港湾都市のアレクサンドリアとした。しかし時代を経るに従い国力が衰えローマの影響力が増していった。

紀元前51年クレオパトラ7世はローマのカエサルやアントニウスと交わり王国の生き残りを図ったが、紀元前30年オクタヴィアヌスの率いるローマ軍に敗れ、クレオパトラは自ら命を絶ちここにプトレマイオス朝は滅び、以後エジプトはローマの属州となっていく。

エジプトは造船技術などの他、天文、医学、建築にも優れた知識を後世に伝えている。

常食は小麦粉のパンであった。興味深いことにすでに紀元前3800年頃にはビールが生産され、庶民に至るまで大いに愛飲されていたというのである。

古代のエジプト人の宗教感の中に、死後來世で永遠に生きるため肉体はミイラとして保存したいと



する願望があった。

エジプトの象形文字はヒエログリフ（神聖文字）と呼ばれている。紀元前3300年ごろにはすでにヒエログリフや太陽暦の利用があった。

1822年フランス人のシャンポリオンは、ナポレオンの学術調査隊の発見したロゼッタストーンやオベリスクを研究し、ついに古代エジプト文字の解読に成功した。古代文字の解読はこの後の膨大な記録を読み解きエジプト文明をつまびらかにしていくエジプト研究の促進に大いなる貢献をなした。

オベリスクは新王国時代に造られたファラオの権威を示す記念柱である。そこには王の名前や神への賛辞が刻まれている。プトレマイオス朝がローマ軍に敗れローマの属国となるとオベリスクは戦利品としてローマへ運ばれ、現在ローマ市内の広場にはエジプトのオベリスクがいくつもそびえ立っている。エジプト国内に残されているオベリスクの数は少ない。パリのコンコルド広場にも天を突いてそびえ立っているし、イスタンブールにもエジプトから運び込まれたものが立っている。古代のエジプトで造られたオベリスクで現存しているのは世界でわずか30本である。



パリコンコルド



ヴァチカンサンピエトロ広場



ローマナボーナ



イスタンブール

1970年秋カイロ空港に降りたった。カイロの印象は埃っぽく車の警笛がひっきりなしに鳴り響きその喧噪にまず度肝を抜かれた。ナイルヒルトンホテルの部屋に入りやっと騒音から解放された。窓からは人類の至宝ともいふべき重要な発掘品を展示する考古学博物館が見える。

翌早朝、まだ薄暗く肌寒い中、エジプトの繁栄を支え続けた母なる川ナイルを見に行った。大きな船が航行しゆったりした流れは悠久を感じさせた。



早朝のナイル川



エジプト考古学博物館

前中は考古学博物館の見学である。前庭に小さな池がありパピルスが植えられていた。三人だけの気ままな旅である。初老のガイドは優秀で歴史を語りユーモアを交えながら案内してくれた。多く

の出土品の中からよく知られている文物を丁寧に説明しながら、そして誰もが知っているツタンカーメンの墓から出土した品々が展示してある部屋へ導かれた。まず写真で見慣れた美しく磨きあげられた黄金のマスクが目にとまる。目の縁をラピスラズリで彩ったくっきりとした面である。因みにこの黄金のマスクは1965年日本にもやってきて大きな反響を呼んだが、現在は国外持ち出し禁止となっている。感動したのは棺の片隅に置かれた枯れた花束であった。これは何かなと思っていると、ガイドはツタンカーメンが黄泉の国への旅立ちに際し妃が添えた花束だと説明してくれた。ツタンカーメンの墓は英国人考古学者ハワード・カーターにより盗掘に遭わない埋葬当時のまま発見され世界中が湧きたった。

車でカイロの郊外へ向かった。街はずれは緑豊かな農地が広がり埃っぽい街中から来ると緑のすがすがしさが心地よい。緑が途切れ砂漠に3つの巨大なピラミッドがそびえ立っている。最初目に飛び込んで来たときは衝撃的であった。クフ王の天を衝くピラミッドは近づくに従い高さを増し人間を圧倒する。次いでスフィンクスへ案内された。スフィンクスは想像していた以上に大きい。

しばらく砂原を走る、サッカラの階段式ピラミッドへ案内された。ついで導かれるままに玄室へ入る。気が付くとセーターを羽織ったままだが汗は全くかかない。日差しは肌を刺すように強いが非常に空気が乾燥しているのだ。喉の渇きが激しい。

遙か遠くに妙な形をしたピラミッドがかすんで見えた。屈折ピラミッドと呼ばれている。建造の途中から傾斜角度を変えたのだそうだ。

エジプトの太陽の光は強烈であるが空気は極端に乾燥している。埃っぽい見学から戻り、ホテルの水道水でうがいをした。どうした訳か吐き出す水がごっくんと喉を下った。2時間後ひどい腹下しとなり悲惨な状況が夜中まで続いた。



パピルスに描かれた絵

ナイルヒルトンの部屋には真っ青なガラスの灰皿が置いてあった。考古学博物館で同じようなものがあったことを思い出しながら一つ失敬していこうと思ったが、部屋の掃除にあらわれたメイドに手ぶりで欲しいというのにっこりしてどうぞという。お礼に和紙で作ったきれいな物入れをあげた。夕飯を済ませ部屋にもどるやメイドが灰皿を10枚も重ねて持ってきて、きれいな物入れと交換してくれというのである。夜の10時過ぎまでドアをノックしながら3名のメイドが入れ代わり次々灰皿を抱えてやってきた。

エジプトの土産品は発掘品のレプリカが多い。パピルスに描いた王と王妃、石を掘りぬいたスカラベなどを記念に求めた。パピルスに描いた絵は家の壁に飾って40年にもなるが色あせることなく元のままの姿をとどめている。現地でパピルスの製造工程を見たが水に浸した茎を縦横に並べ圧搾して水を絞り乾燥させるだけの工程

で立派な紙となった。



さて、エジプトの発掘品の展示ではフランスのルーブル美術館が群を抜いて多くのものを所蔵展示している。印象に残っているのは理知的なまなざしをした律儀そうな書記座像や宗教改革を断行した



書記座像 ルーブル



アケナテン ルーブル

たアケナテンの胸像であろうか。優れた品々はナポレオンが他国に先んじて学術調査隊を随行させ収集させた結果だろう。

一方発掘品で最も強烈なインパクトを受けた物はといえば、ツタンカーメンを除けば、ベルリン博物館所蔵のネフェルティティの胸像である。ネフェルティティはファラオである

アクエンアテンの妃で、ツタンカーメンの

義母といわれている。周りの照明を落とした

暗い中でスポットライトを浴びたネフェルティティは、ぞくりとするほど美しく妖しげな眼差しを向けてくる。伝えられているところによると「ネフェルティティ」とは「美しい女性が来た」という意味であるそうだ。

エジプトは多神教の国であるがとりわけ人間の活力は太陽（ラー）であると考え（太陽神=ラー）を信仰していた。スフィンクスの像はメンフィスやルーブルさらにはローマの博物館等にもある。

ローマのバッラッコ美術館は古代彫刻の収集で知られているが、ここにあるハトシェプストのスフィンクスは石に刻まれた美しい彫刻で訪れる人たちの人気を集めている。

ところで1800年代からみるオスマン帝国領エジプトからはじまる近代エジプトの国家元首の変遷を見ると呼び方が総督次いで副

王、スルタン、国王、大統領と呼称が変わっていく。

1953年6月18日エジプト革命により同国は共和制に移行し、初代大統領はナギーブ、2代はナイル河を堰き止めアスワンハイダムを建設したナセルで在位14年、次はサダトで10年務めたが第4次中東戦争戦勝式典の最中、狂信的な兵士の凶弾に倒れた。代行のターリフは8日間、次はムバラクで何と29年間も任にあり、チュニジアを発端とするアラブ諸国に吹き荒れた「アラブの春」によって退任した。現在はエルシーシ大統領である・

余談 味の素株式会社のかつて社長を務められた鳥羽氏と対談したことがある。休暇の話題になった時、同氏はエジプトへ飛びギザの大ピラミットの頂へ上ってきたというのである。氏は唯一自慢できそうな話ですと笑った。

関係している日本モロッコ協会の活動の一環として、協会でアラビア語の講座を始めようとした時アラビア語の標準はエジプトであり、モロッコのアラビア語は方言であることが判って断念した。エジプトを訪れているとき市内の上空をヘリが編隊をなし頻りに飛びかい騒音がうるさいと空を睨んだ。帰国の日空港へ行く間の土漠にところどころイスや机、さらには観覧席の様な設営が見られた。車窓から眺めながら、何か大きなイベントがあるに違いないとおもった。翌日帰国して驚い

ネフェルティティ

た。エジプト大統領が記念式典の最中暗殺されると大きく報じられていたのである。記事を読みながら歴史の瞬間をかいくぐった思いがしたものである。